

# 幼児の言葉

水谷年恵子

## 正しい發音

知人の家で一人の男児に對して嚴正な言語教育が施されました。此の家では言語學者の父親が非常に周密な注意を拂つて、現代日本の標準語に據つて、男児がほつり／＼單語らしい言語を言ひ出した頃から、正確な言語教育が始められました。未だ口が廻らないうちから、父母を呼ぶにも標準語により、正しい發音で、「お父さん」「お母さん」を呼ばせ、おぢいさん、おばあさん、をぢさん、をばさんから、お菓子、牛乳、おいしい、お湯等、何でも正しい發音で正しい言葉をつかふやうに教育されました。牛乳をギーニーだの、お湯をオユードの、おいしいをオイチイだの言はせません。私は自分のこきを「みいたに（水谷）さんがね」なごこ此の兒に話しかけますが、此の子は何時でも明確に「みづたにさん」を呼びかけます。「暖かにしづらんこいけないの

ね」。なごこ話してゐるこ、「それは關西の方言でせう」。こ言ふ。「じやあ何て言ふの」を聞くこ、「暖かにして居ないこいけないつて言ふの」を教へます。しまひには食物なごこ、「うまい」を言ふは男の言葉、「おいしい」を言ふは女の言葉なごの區別を心得て、男の人に向つては「うまい」を言ひ、女の人に向つては「おいしい」を言ふやうになりました。それが未だ三歳頃の事であります。

此の子も外では數々幼児の言葉を耳にします。世間の母親達はチャ、チュ等の拗音なごを豊富に交へて、あごけなく作りなした言葉を可愛らしい言葉だと思つて、幼兒に向つてしやべつたり、しやべらせたりして居ます。さういふ言葉を此の子も何時の間にか外で覚えて來ます。併し家であつかり口を滑べらせて眞似をするこ、すぐ注意されますので、自分でも其のやうな言葉は良い言葉ではないこ知つ

て氣を附けるやうになりました。

所で面白い現象が生じました。それは此の子は一人つ子で弟妹が無いせい、男の子には珍しく人形遊びが大變好きでしたが、其の人形を遊ばせる時、盛に拗音交りの幼児語をしやべつて居ります。

「花子ちゃん、いらつチャイ。抱つこちてあげまちょ。」

「をばチャマ、だつこちて。」

「チャ、お菓子を上げまちょ。」

「あたチ、もつこ欲チイワ。」

「チャア〜、もトトチュ(一ツ)。」

「おいチイ、おいチイ。」

かう言つた工合に、人形の對話を夢中にしやべつて遊んで居ります。一人で人形遊びをおこなしく而も楽しんで爲て居るので、父親も唯苦笑する外はありません。

此の子は今既に小學校の六年生で、來年は中學生になるのですが、實に言語明晰、日常の談話から、授業中での答辯、學藝會なきでの朗讀、演舌等の明快さ、尋常一年以來小學生の模範として稱讚せられて居ます。これ偏に幼時

の嚴正なる言語教育の賜物であつて、幼兒には正しい發音を以て正しい言葉を教ふべきものである事を知るに足る一つの實例であると思ひます。

### 力音の出ない子

私の姪で幼時力の發音の出来ない者がありました。「母さま」「烏」「お菓子」「かつこ」「釵」等、力音を含む言葉は訛つて不明瞭な發音をなし、正しい言葉として發表する事をなし得ませんでした。母親達のはたでやい〜責めるので、此の子はもう力音を含む言葉を避けて言はないやうになつて來ました。

或時父親が此の子を風呂に入れて、唄を歌つて居ます。

唄の文句に曰く、

神守(近處の町名の角の鍛冶屋のかゝさ(妻)がかんす

(蚊)に食はれて痒い〜。

田舎家の浮世を離れた五衛門風呂の中で、父子が湯につき、子供の身も心も自ら伸び〜とした折を捉へて、此の即興詩(〜)を歌つて聽かせるのですから、自然に面白く子供の耳へ傳はります。子供の口が自然に解けて、つい釣

り込まれて、附いて歌つて見るのであります。

父親は之に味を占めて、盛に力音交りの童謡を作つて、之を歌つて其の効果を収めようと思ひました。そしてよい機會を捕へては歌つたり歌はせたりします。例へば鳥が飛んで行くのを見るを、之を主題にして、

かあらず、勘六、勘三郎、

かあさ鳴け、柿食へ、勘三郎。

さ囃します。又子供が赤い鼻緒の下駄を穿いて遊んで居るを、自分も下駄を穿いて庭へ下りて、子供の手を引き、下駄の音をわざとさせて、

赤緒のかつこが からこんこん

母さんかつこも からこんこん

かあいゝかつこで からこんこん

父親の作がうまい譯ではなく、親心が自ら子供の心に沁み、家族の者の心にも沁みて、父親作歌、竝に作曲の童謡が家内中で大流行、食後なご皆打揃つて歌ひ囃して興に入ります。

ねぎ／＼坊主、かんざし買つて

てふ／＼かんざし、花かんざし

かんざし買つて、ごこへ挿そ

和氣霽々の中に何時の間にやら其の子はちゃんご力音が立派に發音出来るやうになつてゐました。

### 面白い着想

夕月を見て――

三つになる男の子、七日ばかりの夕月を見て、

「あゝ毀れたお月様」。と言ひました。

此の子の腦裡にはまん圓い月だけが映じてゐたものか、さも珍らしいと言ふ面持で夕月を指して、「毀れたお月様」も申しました。片破月・弓張月・絃月・半月なご大人の名附けた名も色々ありますが、「毀れたお月様」といふ表現の面白味に及ぶものは無いやうであります。

百八歳のお爺さん――

幼稚園を持つ或女學校で百八歳なるお爺さんを聘して生徒に長壽の體験を話して貰ふことになりました。浦島太郎は百六つと言ひますが、其の浦島よりも二歳年長のお爺さんを、幼児達にも見せて、長壽にあやからせようと言ふの

で、先づ幼児に豫め其のお爺さんのこゝを保姆が話して聽かせました。

「皆さん、今日は學校へ浦島太郎よりもつ三年の多いお爺さんがいらしやいましたよ。そのお爺さんのお年はね、百八つですよ。」

と言ふに、一人の幼児が、「おー」驚いて、

「こんなに脊が高いでせう。」  
と申しました。

さて其の壽老人はさる寺の僧で、目は新聞が讀める程だが耳が遠く、脊が大分かがんでゐました。酒も煙草も飲んだ事がなく、毎日缺かさぬものは味噌汁と梅干、梅干は小田原から樽で取つて日に三箇宛食べる、總じて菜食で少食、滋養分は一週間に一度位攝取するのみだといふ話を講堂の壇立に起立してゐて大聲に話したのであります。此のお話のある間彼の幼児は眼をまん圓くして百八つのお爺さんを見てゐたさうですが、何ぞ思つたやら知る由もありません。

火事を憎んで――

先頃の日本橋白木屋本店の火災はビルディング火災の嚆矢で、お客に怪我は有りませんでした。店員の中犠牲となつて生命を失つた者が有りました。四階のクリスマスツリーを飾つた五色の豆電燈に通じた電流から火を發し、近くの六坪四方の臺の上に滿載してあつたセルロイド玩具に移つて凄じい火焰を起し、四、五、六階を火の海に化せしめたのであります。店員の人々は上へ上へ火焰に追はれて逃げ、遂に屋上につつて、或は救命袋に依り、或は桶を傳はり、或は急を救ひに來た飛行機が投下して呉れた綱で下りて、九死に一生を助かつた者もあつたが、窓から飛んだり、落ちたりして十四名はあへなくなつてしまひました。

此のデパートの火事は其の後數日間いふもの市民の話題の中心になつてゐました。或家庭でも此の間何か一言へば白木屋の火事の話が持出されました。之を聽いてゐる四歳の女の子、始めは口をさがらせて、

「火事を吐つてやる。」

とおこつて居ましたが火事の話を書くに従ひ憎しみを増して、

「火事をなぐつてやる」。

ミ握り拳で打つ真似をしました。怒が最高潮に達した時、

今度は、

「火事を刀で切つてやる」。

と言ひました。そして、附加へて

「母さん、そしたら火事何て言ふでせう」。

ミ尋ねました。

教育書を繕いて味ふ千萬言よりも、火事に對する子供の言葉はもつこく味ふべきものを含んで居るやうな氣がします。

幼児の吐露する片言に、子供の住む世界が窺はれ、子供の持つ人間性が見られ、子供の伸びる將來が暗示されて居ます。人の子の親も、教師も、幼児の言葉にまづ耳を傾け、心に味つて見るべきであると思ひます。

監倉橋先生		保育叢書		各冊二錢		フレール館發行	
第一編	幼め兒の人の人形芝居脚本	菊地ふじの先生共著	徳久孝子の先生著	第二編	自然物おもちゃ	膳真規子先生著	及川ふみ先生著
第三編	幼稚園の手技製作	和	田	實	驗	保	育
第四編	實	驗	保	育	學	和	田
							實先生著